

今こそ、四国村。

大人になったら行きたい場所

屋島のふもと、家々がたたずむ里山の集落。
石坂を上って吊り橋を渡り、小道の先へと迷い込む。
ひとつ、またひとつと、新たな発見に出会う旅へ。

photo Miyawaki Shintaro



SHIKOKU
MURA
MUSEUM

四国村石舟のアーチ橋
登録有形文化財
年代:1901(明治34)年
旧所在地:香川県高松市国分寺町新名石舟



富木田家砂糺し小屋
登録有形民俗文化財
年代:1800年代後半(明治時代初期)
旧所在地:香川県坂出市青海町



染が滝
彫刻家・流政之により古民家の礎石を組み合わせてつくられた滝。家々の間を抜けた先に開放的な空間が広がっている。



四国村土佐の楕蒸し小屋
登録有形文化財
年代:1920年頃(大正末期~昭和初期)
旧所在地:高知県高岡郡橋原町



収蔵庫から見る屋島南嶺(なんれい)は尖ったような形をしている。
四国村だからこそ見られる角度



丸亀藩御用蔵
有形文化財(県)
年代:1796年以前
旧所在地:香川県丸亀市



四国村鍋島灯台退息所
登録有形文化財
年代:1873(明治6)年
旧所在地:香川県坂出市与島町鍋島



醤油蔵の前にずらりと並べられた醤油甕。取っ手や注ぎ口がユーモラスな表情を生んでいる



旧河野家住宅
重要文化財
年代:1700年代前半(江戸時代中期)
旧所在地:愛媛県喜多郡内子町

生きてきた家たち

香川県屋島の南嶺なんれいに広がる「四国民家博物館」四国村・ミウゼアム（以下四国村）が2022年、リニューアルしました。

石坂に沿って「おやねさん（P30）」が新設され、来場者をかざら橋へと誘います。こわこわ足下を覗くと、ブオーと牛蛙がお出迎え。小道を進むと、ぽつと空が開けて農村歌舞伎の舞台に出ます。その鮮やかな場面転換に、一瞬、

古いにしへの小豆島にタイムスリップしたかと惑うほど。扇状に広がる石段を上ると、やがてなまこ壁のインフォメーションセンターが登場します。ここまで来ると、心身がすっかりこの世界に没入していることに気がきます。

ここはホワイトキューブでもテーマパークでもない、唯一無二の空間。誰の頭の片隅にも残っているような懐かしい景色を見せてくれる場所です。

在りし日の四国を旅するように

四国村では四県から移築された33棟の古民家群が一つの村を成しています。敷地内は5エリアに分かれ、趣ある小道でつながっています。それはちようど、山肌にくつももの集落が集まる四国の里山さながらです。

「それぞれの家が見通せないように、がらりと風情を変えるのがいい」とは、創立に深く関わった彫刻家・流政ながまさ之の言葉。村内に水路や滝を設け、高低差をダイナミックに演出しました。創立時に植えられた樹々は深く茂り、今では周囲の原生林と馴染むように、村全体を包み込んでいます。

海ぎわで、急峻な山で、人馬賑わう市中で…。江戸後期から大正期にかけて長い時を刻んできた家々は、語らずとも当時の物語を伝えてくれるようです。解体の際には専門家が調査を行い、移築時には方角や周辺環境まで、できる限り忠実に再現されました。その多くは文化財に指定・登録されています。

故郷の人智を知るところ

村を歩くと、生まれた地で暮らし、作物を育て道具を作るといふ、人の根源的な営みを意識せざるを得ません。土間に鎮座する巨大な楕蒸し釜ことう。サトウキビを一滴でも多く絞る知恵。工夫の跡は今も色濃く家々に残っています。加えて、庭木の手入れや屋根の葺き替えなど村を維持する作業は絶え間なく、だからこそ時が経つほどに価値を増していきます。

雪深い村の家は囲炉裏を中心に縮こまり、重い屋根を被ります。かと思えば漁村の家はあっけらかんとし、ひゅうっと風が吹き抜けます。灯台守の家は近代化の足音を伝えながらも、雲形の屋根飾りに雨乞いの祈りを偲ぶことができます。つまり、四国は小さなようて実に多様であることを、私たちは家々を通して知るのです。

もし車のない時代に四国を旅したなら、きっとこんな景色が広がっていたのかもしれない。



旧河野家住宅 **重要文化財**
年代:1700年代前半(江戸時代中期)
旧所在地:愛媛県喜多郡内子町

最高齢の森良夫さん(左)と最若手の三村幸味さん(右)。祖父と孫ほども年齢のちがう2人だが作業の息はぴったり。庭の手入れやしめ縄づくりでは、この道数十年になる森さんの指導の下、三村さんから若手職員がその技を受け継いでいる。森さんは「もう任せられる」と太鼓判を押す

秋

風が涼しくなると秋も間近。彼岸花が妖艶に咲き、いつしかキンモクセイの香りが漂います。心地よい虫の声に色づく樹々…小道の散策が何より楽しい季節です。



冬

きりりと厳しい寒さの日には囲炉裏が恋しくなるもの。村内各地で新年を迎える準備が進められます。文化財を守るため、地元消防署との共同訓練も行われます。

春

節句の雛飾りに続きソメイヨシノやモクレンが次々と村を彩り、背後の屋島も山桜に覆われます。チューリップが満開となるといよいよ春もたけなわです。



夏

梅雨に打たれた家々や石畳は静かな風情を醸します。盛夏を迎え、蝉が一齐に鳴く頃になると、染が滝や水景庭園の水音が一層心地よく感じられます。

村の四季

めぐる歳時記

農耕や漁労といった生業の傍らで、祈りを込め、実益を兼ねて行われる多様な手仕事。今や遠い記憶となりつつある風景が、四国村には今も残っています。

秋、村はにわか慌ただしくなり、村外へと稲刈りに出かけ、正月飾りの稲わらを調達するのです。くるりと剥いた柿や大根も干し始めます。88歳を迎える古老の職員・森良男さんの陣頭指揮のもと、稲わらは各家々に伝来する形に緋あかわれ、村内約30ヶ所に飾られます。かと思えば、直後には餅つきが控えていて息づく暇がありません。まさに農村さながらの忙しさです。

同じ頃、家々の囲炉裏に火が入れられ始めます。村にあるどの家も貴重な文化財。一般的には火気厳禁です。しかし、家を長く生かし続けるには虫除けのための煤すすが欠かせません。先人の遺産を守ることとは、絶えず当時のように手を入れ続けることに他ならないのです。

世代を超えてつないでいくこと

家々を守るためには、樹々を剪定し風通しを良くすることも大切です。むやみに伐りすぎることなく、一方で時を経て見晴らしが良くなるように、熟考の上で手入れが進められます。時にはあえて樹高を落とし、茅葺き屋根の高さに花が咲くよう調整すること。周囲を少しずつ変えていくことで、美しい景観を維持しているのです。

開村に際して、民家研究の第一人者・伊藤ていじはこう語りました。「移築された建物が抜け殻になってはいけません。家々での人の暮らし、営みこそが後世に伝えるべきものである、と。

そしてまた「ここで祖父母から思い出話を聞いた子どもたちが、いずれ自分の家族と共に村を訪れてほしい」と、職員職員の一人、新福さんは語ります。

屋島のふもと、大らかな自然と家々が、この先も変わらず私たちを迎えてくれることを願ってやみません。

四国村、
はじまりと
これからと

尾形光琳の扇面よりも、
私は民家を守りたい



加藤達雄 Kato Tatsuo

1961年に現在のカトーレック株式会社を創業。1976年に現在の四国村ミュージアムを創立した。香川県文化功労者



末尾のLECはLogistics (物流)、Electronics (電子機器)、そしてCulture (四国村) を意味する

創始者・加藤達雄の言葉です。
加藤陸運株式会社（現カトーレック株式会社）を創業し、物流・電子機器製造へと事業を広げた加藤は、希代の蒐集家でもありました。金銅仏に魅せられ旅に出て、マティスやピカソまで各国各時代の美術品を集めていました。そんな加藤が生涯をかけて最も熱中したのが古民家でした。
きっかけは、祖谷から古民家を移築しうどん店「わら家（P33）」を開業したこと。葺きだての屋根、そして室内空間の美しさに感銘を受けた加藤は、続いて古民家と歌舞伎舞台を入手し倉庫へと保管していました。
ちょうどその頃、集めた古民

家を野外博物館として展示するアイデアが浮上します。加藤は当時を「美術品を少々手放しても、四国人の祖先の汗と手あかのしみこんだ民家を一軒でも多く助けることの方が大切ではないのか。そう思ったらハラが決まった」と振り返りました。
専門家の協力のもと、さっそく調査がスタート。加藤は四国中を西へ東へと奔走し、時に一升瓶を担ぎながら、集落の道々を訪ね歩きました。時代は高度経済成長の頂点。あわや取り壊し、というギリギリのタイミングで手に入れた家もありました。
そして1976年、四国村が開村。オープニングセレモニーには流政之、伊藤ていじ、猪熊弦一郎、瀬戸内寂聴らが列席し開村を祝しました。彼らから寄せられた温かな言葉の一部を、私たちは現在「おやねさん」で目にすることができます。

創立の想いを つなぐ新・ランドマーク

2022年4月のリニューアルでは、開村当時の想いを次世代につなぐことが意識された。有機的な「おやねさん」は川添善行設計、創立のきっかけとなった「わら家」を見通せる開放的なエントランスとなった

公益財団法人 四国家家博物館 四国村ミュージアム

tel. 087-843-3111
火曜日定休（祝日の場合翌日休）
香川県高松市屋島中町91
9:30～17:00（最終入村16:30）
<https://www.shikokumura.or.jp>



一つひとつが、今も息をしている。なでてやりたくなる。
これ等の木に『よく、永く、生きていたね』
『いい人に救われたね』と言いたくなる。
これで老齢を又一廻りも二廻りも永生きさせる事が出来る。
そして（中略）これ等の家達が、
仲良く当時の若かりし日の事を語り合っているかに見える。

猪熊弦一郎 開村に寄せた祝辞「生きている四国村」より



取材協力 カトーレック株式会社代表取締役社長 加藤英輔様
四国村ミュージアム職員皆様

まだまだ続く余韻の時間 村の出口で一休み

さて、旅も終焉。村をじっくり一巡りすると、ゆうに半日は過ぎてしまう。お腹が空いたらわら家に寄って、うどんを食べるのがお決まり。食後は四国村カフェでカフェタイムを。心地よい疲れに思い出話が広がる。



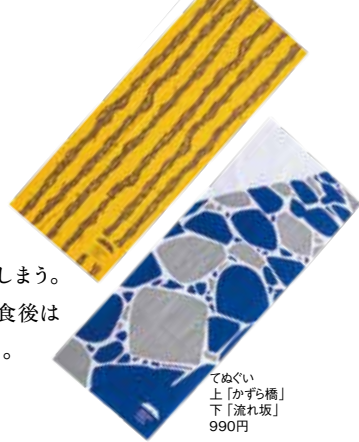
ホテルキーホルダー
880円



讃岐三味クッキー お得パック
左から 和、和盆、醤油
各540円



営業時間 9:30~17:00(最終入村16:30) 火曜日定休(祝日の場合翌休)



てぬぐい
上「かずら橋」
下「流れ坂」
990円

**秘蔵資料にふれる
ライブラリー
おやねさん**
先人の暮らしが垣間見える貴重な秘蔵資料をタブレットで閲覧可。醤油蔵の丁稚による手記「小僧の日記」には思わずクスリとなること間違いなし。シヨップにはオリジナルグッズが揃う。

本場の味をわいわいと
四国村わら家
徳島県祖谷などの古民家を移築した四国村の原点ともいえる店。藁葺き屋根の美しさからその名が付いた。釜揚げうどんは、たらいっぱいの麺を一升徳利に入った熱い付け汁で食べる昔ながらのスタイル。



tel. 087-843-3115 営業時間 9:30~18:00(L.017:30) 年中無休(臨時休業あり)



tel. 087-843-3114 営業時間 9:30~17:30(L.017:00) 年中無休(臨時休業あり)

四国村異人館ワサ・ダウン住宅 登録有形文化財 年代:1905(明治38)年 旧所在地:兵庫県神戸市生田区北野町



神戸生まれの洋館カフェ
四国村カフェ
洗練されたコロナル・スタイルが特徴。ビクトリア時代の家具がそろった館内は、昔前にタイムスリップしたよう。手作りの焼き菓子とスパイシーなグルジアンティーで散策の疲れも癒される。

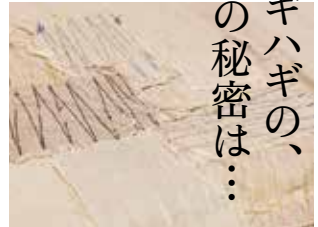


▲2つのとんがりが耳のような「ツギネ」。サトウキビを絞る際、歯車に指を挟まないよう、うにするための道具です。収穫期になると明け方まで夜通し搾汁を行うため、疲労や眠気で指先を巻き込んでしまう事故が後を絶ちませんでした。そんな歴史から生まれた工夫の形です。

ふしぎな形の 鉄製オブリエ?

形が変遷し、道具として完成されていくさまを伺い知ることが出来ます。

四国村では、国の重要有形民俗文化財を含む約2万点もの古民具を収蔵しています。毎月第4土曜日には、その一部を解説付きで紹介する見学ツアーを実施中。主に砂糖の製造に使われた道具を閲覧できます。例えばサトウキビを搾る臼ひとつを見ても、時代を経るごとに素材や



ツギハギの、
その秘密は...

▶砂糖を精製する際、余分な糖を絞り出すために使われた布。垂れ流しの型に置いて使うため四角くはこぼれ、何度か使った布で補修したことが何回も。様々な種類の布を試した中で、輸入小麦の麻袋もその一つだったそうです。



五右衛門 風呂なみの サイズです

一人が入れそうなのに鉄釜は、サトウキビの絞り汁を蒸留するためのもの。完成、中華、揚げ釜を経て、徐々に高度を高め、いきました。固結び、アケガ純物を取り除くための馬毛製の網なども展示されています。

▶こちらは小人数用ではなく、他地域の繁忙期に借りくる借耕牛(ありこうし)が通中履いていたもの。ひづり、滑り止めにもなりました。一面に分かれた牛のひづりに合わせ、前埤と鼻緒がついていました。

これ誰のかな?



「要予約」日時限定
※詳細は
ホームページを
参照

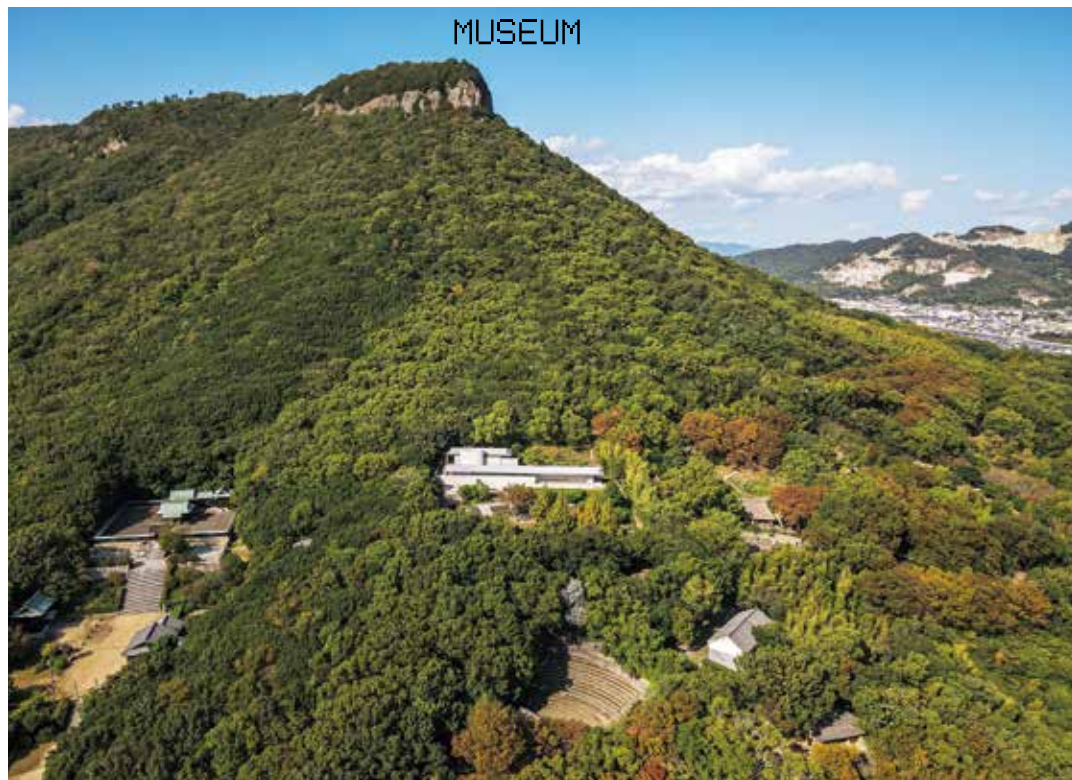


非公開
収蔵庫
見学ツアー

砂糖製造用具収蔵庫内の砂糖づくりに関する道具など約937点 重要有形民俗文化財



SHIKOKU
MURA
MUSEUM



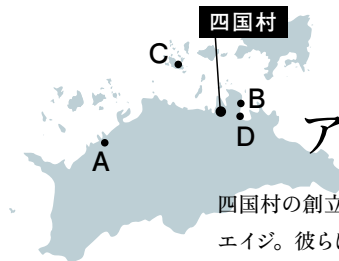
さあ、あなたの知らない四国村へ。



新たに発見されたコトやモノを順次公開し、アップデートし続けている四国村。
秘蔵資料やインタビューをもとに、歴史を深く語る新たな映像などを展開しています。
先人の暮らしと生き様に触れる、探求の旅へと出かけてみませんか。

公益財団法人 四国民家博物館
四国村ミュージアム

<https://www.shikokumura.or.jp>



四国村

四国村を、もっと知る。

アート & デザイン巡礼

四国村の創立期は、才能豊かなクリエイターが香川に集ったゴールデンエイジ。彼らは四国・香川の気候風土にふれ、美しいもの、心地よいものを形づくっていきました。ぜひ、四国村と一緒に巡ってみてください。

猪熊の杜^{もり}



2022年、村の一角に香川県出身の現代美術家・猪熊弦一郎の自宅の庭から分けられたオリーブの苗が植樹されました。加藤達雄と家族ぐるみの交友があった「いのくまさん」。ゆるぎない審美眼で、四国の民家の美しさを心から認めていた一人でした。

猪熊弦一郎の作品に触れるなら…

A 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

常設展の「猪熊コレクション」は必見。天真爛漫な猪熊のまなざしを体験できる

tel. 0877-24-7755



染が滝・流れ坂^{ほか}



昭和を代表する彫刻家・流政之は、加藤達雄とは酒を酌み交わす気心知れた仲。「民家は女性的で静かだから、音の出る滝や石の坂など男性的なものを」と助言しました。礎石を組み合わせた巨大な「染が滝」は圧倒的な存在感です。

流政之の創作の原点を訪ねるなら…

B NAGARE STUDIO

石の里 庵治町にある望海のスタジオ。大小の作品群、山城のような建物に圧倒される

tel. 087-871-3011
要予約



四国村
ギャラリー



2002年、西奥の傾斜地を生かし、加藤達雄の美術品コレクションを展示するギャラリーが建てられました。設計は安藤忠雄。潜り込むような展示室には柔らかに光が注ぎ、来場者は市街を一望できる水景庭園へといざなわれます。

安藤忠雄建築に浸るなら…

C ベネッセハウス ミュージアム

地形を生かし、開口部から自然を導き入れるような安藤建築の魅力が全身で体感できる

tel. 087-892-3223
(ベネッセハウス)



わら家
椅子・テーブル



戦後、オリジナルモダン家具の製造元として創業した桜製作所。県庁をはじめ県内各地の有名店舗・公共施設の家具デザインを手がけました。わら家の椅子・テーブルはどっしりとしていながらも落ち着くデザインで、時を経て建物本体とも調和しています。

桜製作所のものづくりを知るなら…

D 桜製作所

併設の記念館では流政之らとも交流の深かったジョージ・ナカシマの家具に触れられる

tel. 087-870-1020
(ジョージ ナカシマ記念館)

